

1歳の息子とかなえた夏休みの夢 最後の日まで親子3人

有料会員記事

山下剛 2020年10月15日 17時00分



昨年のクリスマスはトナカイに=東京都世田谷区、橋本美穂さん提供



将来の夢は「お母さん」。子どもが好きで保育士になった東京都世田谷区の橋本美穂さん(29)は今年2月、長男の真永(まなと)さんを1歳と5カ月で亡くした。生まれた時から人工呼吸器を外すことができなかった息子。それでも「寂しいけれど、後悔はしていません」と語る。

突然の出来事だった。

妊娠が臨月にさしかかったころ、日課の散歩に出かけていて違和感があった。「いつもはおなかの子が痛いぐらい蹴ってくるのに、今日は全然蹴ってこない」

心配になって病院に向かうと、すぐに緊急帝王切開になった。でも、生まれてきた赤ちゃんの産声が聞こえない。

低酸素性虚血性脳症と重症新生児仮死と診断された。脳に血液が行き届かず、低酸素状態になったのが原因という。赤ちゃんは生まれてすぐに蘇生処置がされたが、医師から後に「脳死に近い状態」と説明を受けた。

「ショックでした。事態があまりにも速く進んで、自分のこととは思えなかった」と美穂さんは振り返る。

いざというときの延命処置をどうするか。病院から判断を求められて、夫で高校教諭の広大(こうだい)さん(35)と何度も話し合った。息子にとって何が幸せなのか。そもそも息子は何をしたいんだろう――。

リビングの壁に、やりたいこと五つ

